

Title	＜翻訳＞オンギン遺跡，歴史文化的解釈の諸問題
Author(s)	Б о й т о в , В.Е. ; 大澤, 孝
Citation	大阪外国語大学論集. 21 p.217-p.239
Issue Date	1999-09-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79809
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「オンギン遺跡、歴史文化的解釈の諸問題」

ヴォイトフ (В. Е. Войтов) 著
訳及び補註：大澤 孝

Онгинский Памятники. Проблемы Культуроведческой Интерпретации.

В. Е. Войтов

モンゴリアの最古の文字資料、即ち古代テュルク時代の石碑上のルーン文字諸碑銘には長い研究史がある。とはいえ、それらの諸テキストは何度も出版され、古代テュルク文化の独特な現象として説明されてきたにもかかわらず、これら諸遺跡については現代のテュルク学者によって十分に解明されているとはいいがたい。そこで、石碑と、石碑の立っていた遺跡の総合的な歴史文化的研究は、紀元1千年紀後半の内陸アジア遊牧民の文化形成と普及において、それらの解釈と歴史的 position を明らかにするうえで新たな展望を切り拓こう [文献 1, стр. 318-324; 文献 2, стр. 58-62]。

モンゴリアのオンギン崇拜・追悼複合遺跡はもう約百年間も研究者達の注意を引いてきている。各国の言語学者達はかなり保存状態の悪い石碑上のルーン文字碑銘に依拠してその年代決定と歴史上の人物との比定に従事してきた。しかし遺跡に関する詳細な記録は文献上には実際のところ存在しない。

本稿の目的はオンギン遺跡の所在地、配置及び残された諸要素について最も完全な情報を提供すること、そしてルーン文字碑銘の既存の翻訳と漢文史料の事実に基づきつつ、碑文の年代決定とその所属に関して新しい案を提示することにある。

本遺跡は、モンゴル人民共和国のオブル・ハンガイ県のオヤング・ソムから南方へ17kmの地 [かつてのサイン・ノイオン (Сайн-нойон) 寺院があった] で、オンギン川にその右岸の水量の少ない支流タリマル (Таримал) 川が注ぐ合流点の近くのある場所にある。追悼遺跡はマニト (Мааньт) 川の右岸から約300m (補註) 南方のあまり広くない谷間の真ん中に造営された。この地点では谷間の北側を低いマニト・オラ (Мааньт-ула) 山が、東側をホシュ・オラ (Хуш-ула) が遮っている。

本遺跡は1891年にオルホン調査隊に参加したヤドリンツェフ (Н. М. Ядринцев) が発見し

た。彼は当時、自らの日誌に次のように記している：「マニト (Маниту) 山 (モンゴル語では Мааньт-ула – 筆者記) の山麓の、見通しのよい盆地にオベリスクに類するものを見た、(中略)、石碑は、(中略)、特筆すべきもので、特にルーン文字を伴った探していた石碑であることがわかった。碑文は南を向いて立てられており、その二つの面にはルーン文字が刻まれていた。半円形の柱頭には、他の突厥の墓地にも特有の象徴化された記号、何かしら “Я” の文字に似た表現 (雄山羊タムガー – 筆者註) が描かれていた。石柱は一部、既に風化し始めていた、(中略)、石碑は鳥の糞で覆われていたので、掃除しなければならなかった。石碑の基部には埋め込まれていた板石が見え、石碑自身は花崗岩製の、亀の形と推測できるような台石の上に立っていた。石碑から南へ15歩の地点に4体の花崗岩製の座った人間を表現した石像があったが、例の如く、頭部はなかった、(中略)、しかしいくつかの花崗岩の破片があった。石像はかなり壊されていた」[文献3, стр. 43]。

ヤドリントツェフは碑文の拓本 (Естампажи) と何体かの石人の写真を取って、オルホン調査隊の隊長であるアカデミー会員のラドロフ (В. В. Радлов) に送った。ラドロフはロシア帰国後にこれら資料を自身の『モンゴリア考古図譜』(以下、『アトラス』と略称する – 訳者記)[文献4]の第1分冊に収めた。1893年にクレメンツ (Д. А. Клементи) は同じく碑文の拓本を取ったが、遺跡全体の状況に関する情報は彼の野外日誌にはない[文献5, стр. 270]。

1895年にラドロフは、オンギン碑文の印刷テキストと最初の訳文を公刊[文献6, s. 246-252]する一方で、碑文の第2番目に修正された拓本 (отгиск) の複製を『アトラス』[文献7]の第3冊目に掲載した。

1909年には本遺跡においてフィン・ウゴール協会の調査隊、ラムステッド (G. J. Ramstedt) とパルシ (S. Palsi) が調査した。彼らもまた碑文の拓本を取り、多くの写真を撮り、初めて遺跡の見取り図を取った。1911年にパルシは調査隊の調査作業に関する報告を発表した[文献8]。1949年にはその新しい校訂版[文献9]とラムステッドの回想録が出版され、後者はその後また出版された[文献10]。我々はこれら既発表書から情報を入手できなかった。それ故、フィン人の学者たちの調査記録はパルシの記念に捧げられた最新の出版物[文献11]に依拠して、また同じく1970年にドンネル (O. Donner と K. Donner) の家族からフィン・ウゴール協会に寄贈されたラムステッドとパルシの公刊資料や写真やスケッチを利用したトリヤルスキ (E. Tryjarski) とアールト (P. Aalto) の出版物[文献12, p. 413]に依拠して述べることにする。

フィンランド人研究者はオンギン遺跡を「タリマリン・ホシヨー (Тарималийн-хушо)」、もしくは「タリマリスカヤ・モギーラ (Таримальская Могила)」と呼んでいるが[文献12, p. 417]、この方がその現地名には見合っている(学術用語としては遂に、定着しなかったのではあるが)。平面図[文献11, 表10]によれば、この追悼遺跡は東西に長く、隅が丸い閉じられた長方形をしていて、内側の周溝と外側の土塁(図1, 5-6)からなっている。中央の

マウンドの西部に、以前には4つの板石からなる棺(ящик)の隅に沿って置かれていた石3つが表現されている。しかし板石やその破片もとの位置は分からなかった。

フィンランド人の学者達は石羊と4体の石像を写真撮影している[文献11, s. 80-82]が、彼らの平面図にはこれらの石像グループには含まれないただ1体が表示されているだけであった(図1, 7)。平面図には亀趺上にあった周知の石碑はなく、この点について彼らは次のように記している:「この石はかなり地面に埋まっていて、その一部が砂に覆われた碑文と亀の形をしたすばらしい土台石を見るために、我々はシャベルで台座をきれいにし始めた」。その結果、碑文が何断片にも砕かれていることがわかった[文献12, pp. 415, 417]。失われた頭部を伴う亀のユニークな写真をトリヤルスキは発表している[文献13, 図16]。

フィンランド人の学者達が第2石碑の礎石を発見したことは、長年注意を払われぬままであった極めて重要な事実である。とはいえ、彼らの言葉によれば「礎石に立っていた石自体が見つかる可能性はないことが分かった。礎石は幅広で、十分に加工が施されていた」[文献12, p. 417]。この正方形の花崗岩製板石は各面の寸法が145×150×143×148cmで、その表面には「腹ばいになった」亀の像が描かれていて、中央部では本体の碑文を固定するための長方形(43×28cm)のほぞ穴がくりぬかれていた。板石は中央マウンドの東部にあった(図1, 2)。しかもパルシは板石での亀頭は西方に向けられていたと述べている[文献11, p. 130, 図79]。平面図上ではマウンドの北東隅と南東隅には2つの小さな正方形の石堆があらわれ、そこでは煉瓦と瓦の破片が見つかった。北側の小丘の中央には丸い窪みが示される一方では、その窪みの北東隅には立石が表示されている；同様の石は南側の小丘の中央にも表わされている(図1, 3-4)。

トリヤルスキとアールトの言葉によれば、「パルシの1枚の写真はその裏側に次のような説明文、即ち“タリマルの墓；ウイグルの碑文と記号のある第1の石柱”が残っていた」[文献12, 417]。このルーン文字碑銘と雄山羊タムガをもつバルバル石は東方に伸びた列石の先頭に立っていて、拓本や写真が撮られ、また計測された(その高さは93cm)(補註2)。しかしパルシの平面図にはそれはない(図2, 6)[文献11, 図83]。フィンランド人の旅行者達がバルバル石をその最初の位置に立っているのをみた最後のヨーロッパ人であった。

1920年代中頃までオンギン遺跡の学術調査はなされなかった、即ちこういった時期に遺跡はよくある破壊を被った。現地の口伝は次のように伝えている、ここに財宝を求めたラマ僧達が銀板、馬の頭骨、馬具や土器片を発掘したのち、棺(ящик) - 「石槨(саркофаг)」の装飾板石を壊して、その場所に掘られた穴に投げ入れた。ようやく吹雪を伴う強風のため、やむなくラマ僧達はそれ以上の試掘をやめざるを得なくなった；彼らは天候の急変を神々の憤怒の現れとして受け入れたのであった[文献14, p. 167]、と。とにもかくにもまさにこの時に、遺跡表面からは石碑の断片、大きい亀趺や幾つかの石像が消え去り、その一方でそれ

らの場所には多数の穴が現れた。

1926年にオングイン河上流で越冬したコズロフ (П. К. Козлов) は「タラエレンーホショー (Тараэлэн хушо)」(Тарималийн-хушоの誤記) の草原を訪れた。そこには「他でもなく墓に立っていた一連の花崗岩製の人間像のあることがわかった。今、これら人像は惨めな光景に曝されていて、それらすべてが割られたり、破損したりしている (略)」。彼はただ3体の石人像と2体の石羊像を、また「恐らくは最近に掘りだされて、穴に投げ込まれた花崗岩製石板の縁」を見た。平らな所には、やや脇の方に大きな長方形をして、すばらしい保存状態のよい装飾の施された灰色花崗岩製石板 (縁は壊されているが) が横たわっていた。すべてこれら石像が立っていたマウンドから東方に、山 (Хуш-ула, 筆者註) に向かって珪板岩製の低い柱状立石が一直線状に伸びていっていた」[文献15, p. 117]。コズロフは一連の写真を撮ったものの、一枚も公表されなかった。

再びオングイン遺跡が学者の注意を引いたのは1962年のことである。その時モンゴル人民共和国とポーランド人民共和国の両科学アカデミーの相互協定に基づき、ポーランドの研究者トリヤルスキがモンゴリアに赴いた。9月28日から10月7日に中央県、ボルガン県、アルハンガイ県やオブルハンガイ県を訪れた時、トリヤルスキはオングインをも含めた幾つかの諸遺跡を調査して、400点以上の写真を取り、映画を撮った [文献13, p. 122]。彼は自身の論文のひとつに次のように書いている:「オングイン遺跡は荒廃してはいるけれども、その亀趺 (大きい方の、彫刻タイプの一筆者註) は今日まで生き長らえた。亀趺は現在、みすばらしく、稚拙なように見える」(図2, 7) [文献13, p. 130]。トリヤルスキは遺跡の新しい平面図を取り、2体の石羊像と3体の石人像を写真撮影した [文献13, 図18-20; 14, 図11-13, 25]。

トリヤルスキは、かつてヤドリツェフがそれに関して、「石像は両膝をついて座っているように見える。そして両腕に、巨大な杵か、逆さまにした楕円形容器を想起せしめる奇妙な楕円形の物体を抱えていたが、いざれにせよこれは酒樽や臼ではない、というのも楕円形部分の上部に穴のあいた特徴がなかったからである。この物体の意味を我々は推察することができない」[文献3, p. 43] と記した謎の彫刻に特に注目した。トリヤルスキの言葉によれば、これは「大きさの点で、座った石像と比べてみるとかなり大きなもので、我々が考えるように、容器、それもおそらくは摺り鉢」[文献13, p. 132. 図20; 11, 図80 (右)] であろう。高さは32cm [文献14, p. 166, 図11 (左)]。

1962年10月3日にトリヤルスキはそのひとつに若干のルーン文字が、他方には雄山羊型タムガ [文献14, p. 161; 16, p. 629] が残された石碑の小断片3つを見つけた。トリヤルスキから自分の発見のことで話を聞いたアルバイヘール市の郷土博物館館長のナムハイダグワ (Ж. Намхайдгва) は、すぐに銘文のある破片を博物館に移すことを約束した。そして彼の側からは、少し前にオングイン遺跡の装飾石板の下で、陳列品に含まれている灰黒色の陶器の破

片37点を見つけたことを知らせた【文献14, p. 167】。

1969年にナムハイダグワとアカデミー会員リンチェン（Б. Ринчен）は、トリヤルスキにこの市の博物館に収蔵されたルーン碑銘のある石碑の2破片（仮に大断片と小断片と呼ぶことにする）の写真とスケッチを送付した。大断片がどこで発見されたかをリンチェンは述べなかった。一方、博物館館長は小断片は1968年3月10日に、オンギン遺跡から約300mの地点で拾われたと知らせた。彼の推測では「石はその直前に、恐らくは1967年に何者かによってそこへ運ばれたのかもしれない」という。石には文字が白ペンキで判別しがたい程度にまでそれらを汚して書かれていたにもかかわらず、トリヤルスキはそれらを「オンギン遺跡の貴重な石柱」の諸断片と認めた。リンチェンが写真を公表した際、大断片は2つの面が示された【文献16, 図45】。

1987年に筆者とモンゴル人考古学者のバヤル（Д. Баяр）はモンゴル人民共和国のハンガイ地区にある古代テュルクの追悼遺跡の探索と調査をした。数日間、我々はアルバイヘル市博物館とオンギン遺跡で調査をした【文献17】。しかしその時の日記帳の点検によって我々はほんの少しではあるが、トリヤルスキが公表した測量概略図に修正を施すことができる。東西方向に長い土塁と周溝の長方形の長軸は北東－南西方向に15度傾いている。輪郭のぼやけた土塁外側の裾に沿っての遺跡の寸法は68×48m；土塁の幅は5 m、高さ約15cm；周溝の幅5－7 m（深さ約25cm）である。土塁の東側には幅3 mの入口があり、それに続いて980mにわたり、立ったり、横倒しになった石166個が数えられる。銘文とタムガをもつバルバル石は見つからなかった（補註3）。

遺跡の表面には草がかなり覆っていて、特に周溝の低くなった箇所や盗掘者の残した多数の窪みではそうであった。中央マウンド西部では、以前発見された4つの板石からなる棺（ящик）の発見された地点には、盗掘坑の排土で周囲が盛り上がった深さ約70cmの穴が見られた。その北西部には、石棺の角を補強する補強用の石の先端部が突き出ている、その一つはパルシの平面図に示されている。マウンド中央には様々な寸法と深さの幾つかの穴が見られ、そこには煉瓦や瓦の破片が見つかり、また同じくそれ以前の研究者には知られていない人像の胴体部が見つかった（図3, 4）。マウンドの東端の広い窪みには上記の石人の下半身部が見つかった。1909年にはここで第2石碑の下には板石状礎石（плита-подставка）が見つかった。一方、現在では穴の北東縁に何も表現されていない灰色花崗岩製の小柱が立っている。穴から南北へは中央に窪みのあるはっきりしない形をした低い盛り土が見られた。マウンドの北東隅で、マウンドを囲む周溝との境にはさらに、パルシの平面図にも示された、何の表現もない1個の低い花崗岩製の小柱が立っている。

マウンドの南部にはヤドリンツェフの時代から残っていた石人群があり、それらと当時ここに立っていた石碑との間隔は、彼の言葉によれば15歩幅であった。今、この中間にはただ窪みだけが見られ、その一つには恐らくは著名な石碑と亀趺の破片がある。ヤドリンツェフやフィンランド人の学者達が言及した4つの石人像のうち、コズロフとトリヤルスキはただ3体のみを見つけた；すべてこれらは現在まで残っている。

石人1：コズロフとトリヤルスキが言及している〔文献15, p. 117; 文献14, p. 167. 図11右〕。すべての石人と同様に、これは明灰色の花崗岩から彫られ、またかなりひどく破損している：頭部は失われ、胴体は帯の高さのところで2つに割られ、両腕はたたき落とされていた－左手はただ膝においた掌と袖口が残されているだけで、右手は胸に押しつけられていた。大きな腹をした座像は胸もとには広くて三角状の襟のついた長い上衣を着ていて、(右脚を左脚の上におく) 胡座した脚を隠していた。右脇と左から背中にかけての箇所には2つの丸い膨らんだ小袋 (каптаргак) (図3, 1) が見られる。石像の高さ84cm, 肩幅60cm, 石の厚さは約50cmである。

石人2：やはりひどく壊されていて、頭部は失われ、(前膊から) 両腕はたたき落とされ、両膝には欠けた箇所がある。背中と両脇には2本の小溝によって細い帯が示されている。石人像の前の地面には、その上部がひどく欠け落ちた大きな楕円形の物がある(図3, 3)。石像の高さは70cm, 肩幅42cm, 厚さ約47cmである。特にこの石人はそれ自身の図像学的珍しさのためヤドリンツェフとトリヤルスキの注意を引いたが、これに類似したものはモンゴリアの他の古代テュルクの追悼遺跡群にもある。

地面に立つ大きな「楕円形物」をもった全く同一の石像は司令官キュリ・チョルを記念して建造されたイフ・ホショート遺跡にあった。これよりは小さくてひどく破損され、右手で下皿付きの容器をもつ正座した石像が、トラ河溪谷のムハル遺跡とトニュククを記念して建造されたツァガン・オボー第1遺跡に見られるが、後者はパルシの写真〔文献11, 図68 (右)〕でしか見られない。西トルキスタンのアフトフ型の容器を右膝の上に立ててその細い頸部をもっている出来のよい坐像が1912年にコトピッチ (W. L. Kotwicz) によりキョル・テギン遺跡で発見された〔文献18, p. 70〕。3体の石人における独特な姿勢とはっきりと表現された液体貯蔵用容器の形からみて、これはオンギン遺跡とイフ・ホショート遺跡の「楕円形物」が、ワインかクミズを入れる皮革製袋もしくは土壺で、石像そのものが「猷酌侍従」以外の何物でもないことが確証されよう。

石人3：(頭部が失われた) 座像石人で、両手で不明な物を胸に押しあてている。腰にそって、二本の刻線で広い帯を刻んでいる(図3, 2)〔文献14, 図11 (中央)〕。石像の高さは63cm, 肩幅45cm, 厚さは約47cmである。石人4は、1987年に発見された。図像表現として、先程の石人3と同じであるが、ただ寸法は小さく、また帯はない(図3, 4)。石像の高さ51cm, 肩幅33cm, 厚さは約30cmである。これらの石人が立っている石堆中から1987年

には小さな坐像石人 No. 5の3つの断片が見つかったが、これらは頭部、胴体、下部に相当する；当初の石人像の高さは45-50cmである(図3, 5)。

フィンランド人研究者達の写真からはさらにもう1体の首の切り落とされた石像 No.6(寸法的には石像2と3に近似)が見える。これは左手を膝上に置き、右手を胸に当てている(図3, 6)。石像は現在紛失している。『アトラス』には、人間の形を模して粗く仕上げた立石の下部だけの図が載せられている。わずかに、胸に押しつけた両腕の肘(?)とその下に大きな雄山羊型のタムガだけが見える(図2, 5)[文献4, 表14.3]。現在はこの石は遺跡から失われている(補註4)。明灰色の花崗岩製の2体の伏せた羊像彫刻はひどく破損していて、頭は失われ、胴部の表面は破損や風化で傷だらけである。石羊の長さは64cmと71cmである(図3, 7)。

儀礼用の棺(ящик)には目の小粒な灰色花崗岩製石板のただ2破片のみが残っている。その外側には浅い浮き彫りで(地の部分が彫りくぼめられている)、複雑な円花文が刻まれ、それは大きな四角い枠に囲まれていた(図4, 1)[文献19, p. 26; 20, p. 398; 文献14, p. 167, 図14]。この棺の四隅を補強する一つの石は完形で、高さが72cmあり、石人群の近くに横たわっている(図4, 5)[文献14, pp. 166-167]。同様の石が、ホイト・タミール河のトグロヒン・タル(Тоглохын-тал)第2遺跡とケルレン河のゲン・ブルド(Гун-Бурд)遺跡及びトラ河のツァガン・オボー第1遺跡にあるのを著者は知っている。しかも、ツァガン・オボー第1遺跡の石の外側は刻文で装飾されている。

我々の意見としては、石堆からパルシとトリヤルスキが述べた第2石碑の花崗岩製の礎石(板石の厚さ11-14cm)とまさにこの碑頭(板石の厚さ18cm)と見なすべき2つの破片が見つかったことはきわめて重要である。礎石の後部断片には六角形の亀甲文が彫られていて、先頭の方には平たい板石上に円形の頭がかすかに突き出て、そこには大きく隆起した両目や彫られた渦巻き状の両耳、大きな広い鼻と広く大きく開けられた口が見られる(図4, 4)。碑頭は上部が円くされ、広い方の両面には雄山羊タムガとおたま形の記号が刻まれていた(図4, 3)。トリヤルスキは1962年のモンゴル調査旅行に関するほとんど全ての論文で、彼が知り得た石碑断片をオンギン碑文に比定している。我々の計算によれば、さしずめ問題となるのは以下の5断片ということになる。

1. 1987年に記録された石碑の頭。トリヤルスキは地面にはまっていた破片をみつけた。それ故、その高さ(42×39cm)を正確に測定したが、厚さを8.5cmと不正確に述べ、そしてタムガがただ一面にのみ表現されているとみなした。トリヤルスキの見解ではこの断片は、ラドロフの『アトラス』の表14-3で示されているが、現在では失われている石像7[文献14, p. 167]以上に、同書中での著名な石碑の頭部を想起させるという[文献4, 表26, 1]。2つの石碑は上部の形が違っている[以前に発見された石碑で上部は平たくされているのに、新発見の石碑は円くなっている；第1石碑のタムガは銘文の上にただ片面にのみ彫られているのに、第2石碑では両面に彫られている；タムガの書き方も、おたま形記号の数が異なっている(cf. 図4, 2と図4, 3)]のであるから、2つの碑頭は別々の碑文のものであったこ

とになる。

2. 1962年にトリヤルスキは本遺跡で2つの部分に壊された「真ん中の長めの石」(寸法71×34×15 cm)を見つけた。その上部先端は砕かれ、下部は狭くて丸くなっていた【文献14, p. 166. 図24】。スケッチによれば、これは亀趺にはめこまれたのではなくて、地面に直接建てられた石碑下部であった(図2, 1)。残念ながら、我々は現地でこの断片を見つけだせなかった。それ故、その割れ目と新たに発見された碑頭の割れ目とが合うかどうか断言することはできないが、ただ断片1と断片2の幅と厚さが近似しているということ是可以(補註5)。

3. トリヤルスキは彼自身の著作において、さらにもうひとつ横倒しになっていた石があり、彼がその上にルーン文字銘文があることに気付いたこと、その寸法は19×16×9 cmであったことを述べた。1968年に当石はナムハイダグワによって「オンギン遺跡から300mの地点で」拾われて、博物館に移された。この破片は切り口が長方形の、やや白っぽい灰色の目の小粒な花崗岩製の板石で、長さは16-17cm、幅は16cm、厚さは8,5ないし10,3cm、各面は滑らかに磨かれていた。広い面のひとつにはいくつかのルーン文字が残っており、縦に3行にわたり配されていた；当初それらは恐らく4行あったのだろう(図2, 2)。断片はすべての他のものとは幅や文字の寸法や文字の間隔や行の間隔といった点でかなり異なっているので、それに関しては何か別の遺跡に属するものといえよう(補註6)。

4. アルバイヘル市博物館には明るい灰色の花崗岩製で、何らかの鉱物の金色の含有物の混じった石碑のもう一点の断片が保管されている(長さは約29-30cm、幅21cm、厚さ16cm)。その2つの刻面はざらざらしていて、他の2つの面は滑らかに磨かれていて、しかもその1つの狭い方の面にはルーン文字が3行配されていた(4行目はすべて剥落していた)(図2, 3)。トリヤルスキは、彼が現場にそのままにおいてきた断片3は色と材質面で、既に当時、博物館にあった断片4に合うこと、そしてこれら2つは著名な碑文の一部であると結論づけた。彼は約20文字を確定し、それらが本来の碑文では、第5, 6, 7行目の断片に当たるということを明らかにすることに成功した【文献14, p. 167-168. 図15,26,27】。マローフ(C. E. Малов)やクローソン(J. Clauson)の翻訳によれば、ここにはトグズ・オグズの突厥に対する2度の反乱のことが記されている。銘文の幅や位置の点で異なった断片3と断片4には当初から各4行あったのに対して、周知の如く、本来のこの石碑正面の広い面には8行あった。断片3と断片4の2つはただ上部と下部だけが叩き折られていたのであり、側面はもとのままであった。即ち、それ故それら2つをヤドリントゥエフが発見した石碑の断片とみなすことはできないのである。断片4(中程度の方)は、その発見地が博物館の文書には記録されていないし、断片3(小さな方)は寸法の点で新発見の碑頭には合致せず、何らかの未知な石碑の一部である(補註7)。

5. 博物館に保管されていて、リンチェンがその写真を(発見地については言及せずに)トリヤルスキに送った石碑の大断片もやはり著名な石碑とは何の関係もない。それは灰色の花崗岩製の石碑の下部であり、その隣合った2面にはルーン文字が4行づつ悪い状態で残っ

ている。破片の高さは79cm、銘文の刻まれた片方の刻面幅は18cm から22cm、他方の幅は18cm、滑らかな面は16-18cm と20-22cm である；断片の下部には凹凸のある鉾石の出っ張りが残っていた（図2、4）。トリヤルスキはこの断片を彼が1962年に見たものには数えておらず、1969年の写真をもとにそれについて記している。それ故、彼の結論はこのケースにおいても、我々が考えるように誤ったものである。これもまた、未知な古代テュルクの石碑である（補註8）。

我々には、断片3が自分達によってオンギン遺跡群で発見されたと主張しているトリヤルスキとナムハイダグワの証言を疑う根拠はないが、これらの情報はそれでもなお念入りの現地調査を要する。ただ計画的な発掘を行なって、石碑の新断片が見つかった時には当初の断片の数を明らかにすることができるが、今のところ、やはりここにはただ2つの石碑があったと述べるにとどめおくべきではあろう。第2石碑（断片2）の基部は直接地面に差込まれていたのに対し、紛失した主要な石碑は特別なほぞを記念彫刻たる亀趺（図2、7）の背中にある横長のほぞ穴にはめこんで固定されていた。亀甲文をもつ板石は石碑を支えるものとしてではなく、ただの装飾用の枠としてのみ役割を持ち、一定の象徴的な機能を果たしていたのである。

周知の如く、紀功碑は紀元1千年紀後半のテュルク国、ウイグル国、キルギズ国での最高位の遊牧貴族の代表者達の死後、敬意を表して建てられた。現在の学界には、全部で8つの古代テュルク石碑が知られている。そのうち1つは突厥第一可汗国期（551-630年）のものであり、残りが突厥第二可汗国期（682-744年）に属する。諸石碑の外観と設置方法からみると、3つのグループに分けることができる。即ち1）石の亀趺に立ち、碑頭に竜の彫刻が施されたもの〔ブグト石碑-タスパル・カガン（補註9）の記念碑（582年死亡）；ホシヨー・ツァイダム第2石碑-キョル・テギン（732年死亡-731年の誤りであろう、訳者記）の記念碑；ホシヨー・ツァイダム第1石碑-ビルゲ・カガン（734年死亡）の記念碑〕；2）亀趺に立つが、碑頭に竜の彫刻（螭首）が施されていないもの〔2つのオンギン石碑（補註10）〕；3）単なる礎石に立ち、碑頭に竜の彫刻が施されていないもの〔ツァガン・オボー第1石碑-トニウクク（720年代死亡）の記念碑；イフ・ホシヨート石碑-キュリ・チョル（730年代初頭死亡）の記念碑〕がそれである。

古代テュルクの追悼遺跡で、それらがカガンのものと規定する最も重要な属性とは、石碑上部の彫刻である。例外はホシヨー・ツァイダム第2遺跡の石碑で、それにはキョル・テギンがカガンでなかったにもかかわらず、碑頭に竜が表現されている。亀趺は、カガン氏族の各成員に対するのと同様、彼に対しても当然のことであつたし、竜の碑頭は彼の、その国家への抜群の軍事的功績のために贈られたのである。第3グループの石碑（竜の碑頭も亀趺もない）はカガン氏族たる阿史那一族出以外の人物のために建てられた。生前に「ボイラ・バガ・タルカン」の称号をもつトニウククは、テュルクの貴族である阿史徳氏族出身であつた。一方、キュリ・チョルはテュルク軍の西方翼の司令官であり、同盟者タルドゥシュの長であつ

た。このことから、第2グループの（亀跡をもつが、竜の碑頭はない（補註¹¹））オンギンの2つの石碑は突厥第二王朝のカガンの親族に属していたと結論付けられよう。

オンギン石碑の主碑文の主人公を明らかにする試みは既に幾度となく行なわれてきた。ラドロフとマローフは主人公をイルテリッシュ・カガンの名に、ベルンシュタム（А. Н. Бернштам）はカプガン・カガン（筆者はカバガンКапаганと綴るが、大澤はКапганの転写を是とする立場から、カプガンに改めた）の名に、他方クローソンは司令官アルプ・エレットミッシュ（Алп-Элетмиш）の名（補註¹²）に結びつけた。現在では最後の説が最も受け入れられている。

この石碑の縦12行にわたるルーン文字テキストは2面に配されている。つまり第1－第8行までは広い西の面に、第9－第12行は狭い南の側面にある（補註¹³）。さらに後者の上方には水平に7行からなる短い補足されたテキストが配列されていた。クローソンの翻訳によれば、銘文には突厥第二王朝の3人のカガン－イルテリッシュ、カプガンとビルゲーの名と、また血縁関係を有している3人の人物、即ち父がエレットミッシュ・ヤブグ、長男がイシュバラ・タムガン・チョル・ヤブグ、次男がビルゲ・イシュバラ・タムガン・タルカンの称号をもつアルプ・エレットミッシュ、が挙げられている【文献21, pp. 177-192】。

銘文ではいろいろな事件が次のように述べられている。第1－3行目ではイルテリッシュの興隆までの突厥史が簡略に物語られている。第4行目では銘文の主人公の名前と称号が列挙されている。第5－8行目にはトクズ・オグズ部族の2回の反乱に関連した事件が記されている。狭い面にある第9行目（マローフによれば、O a, 1にあたる【文献22, p. 10】）では、すでに刻銘者であるアルプ・エレットミッシュ自身について彼の名において物語られている。テキストが大きく失われているが、ここでは極めて簡略に、K..の都市が彼に占領されたことについて、一方、第10行目（O a, 2）では「2つのエティグ（Етиг）」（?）への遠征について述べられている。第11行目（O a, 3）ではアルプ・エレットミッシュが自分の息子達と弟達に対して、アルプ・エレットミッシュ自身もカプガンとイルテリッシュの国に育った」（第4行）のであるから、彼の父、即ち以前にはヤブグの称号を帯びていたシャドのエレットミッシュが前カガンに忠誠を誓っていたように、ビルゲ・カガンに忠誠を保つようにと訴えている。主碑文の最後の第12行目（O a, 4）はアルプ・エレットミッシュによって、既にマローフによれば「タツ年」（728年）、より正確にはクローソンによれば「ヒツジ年」（731年）の7月に、彼の父が死亡したと記されている。

突厥第二王朝の存在期間における「ヒツジ年」は、683、695、707、719、731と743年にあたる。しかし第11行目でのビルゲ・カガンの名前が挙げられていることからみて、（彼の治世の初年の）716年以前と、（彼の没年の）734年以降のすべての年代は除かれる。つまりエレットミッシュ・ヤブグが没し、石碑を含むオンギン遺跡群が建造された年として最も可能性のある年としては719年と731年の2つの年だけが残るということになる。クローソンは、刻銘者がトニウクク銘文を熟知していて、かつそれを「お手本（шпаргалка）」として役立てさせたこと【文献21, p. 183】、また同様に「彼がキョル・テギンの葬儀に出席した客の一人であった」

こと、そこで彼は「つい先頃没した自分の父のために遺跡を建造するという考えを借りた」という推測に基づきつつ、後者の年を主張している【文献21, p. 192】。それと同時に、732年に没したキョル・テギンの記念遺跡は733年に完成された（事実はキョル・デギンの死亡は731年で、記念碑建造は732年である一訳者）、従って、731年に死んだ人物を記念して建造されたオンギン記念遺跡に準じて、その設計を模倣したというに至っては、問題外である。

ラドロフに続き、マローフはオンギン銘文の翻訳の前文で、これは「古い遺跡の一つ」【文献22, p. 8】と指摘した。一方、グミリョフ（Л. Н. Гумилёв）は「遺跡は716年後まもなくして建てられた」と考えている【文献23, p. 272】。確かにオンギンの記念遺跡は突厥第二王朝の枠内では年代的には最も古い遺跡である。我々の考えでは、銘文の主人公エレトミッシュ・ヤブグが死んだ「ヒツジ年」は731年ではなく、719年に該当し、従って、まさに同年とその翌年にオンギンの追悼遺跡群が建造され、そこに大部な銘文をもつ石碑が立てられたということになる。

では、エレトミッシュ・ヤブグやその息子達とは一体だれなのか？ オンギン銘文に登場するそれらの人名は、これ以上いかなる歴史史料にも見当たらないのであろうか？

この問題は、ただ総合的に文献史料と考古学的資料を比較しつつ、解決できよう。クローソンはその年代決定にあたって、ただ石碑テキストに依拠しているだけで、石碑がその構成要素の一部となっている遺跡そのもののプランを調べる機会を持っていなかった。また個々の要素には違いがあるにもかかわらず、突厥第一可汗国期（ブグト遺跡）以来の一貫した建築上の計画によって造営されている遺跡群の構造を知らずに、類似に基づきそれらの年代を決定したという点で安易に誤りに陥ってしまったといえる。それと同様のことは、あたかもオンギン銘文の作者が利用したという「お手本」についてもいえる。記念や凱旋のための銘文テキストはテュルク人やウイグル人によって、後にはキルギズ人によって、やはりブグト銘文の時以来知られている一定の基準に従って作られたのである。

漢文史料とルーン文字テキストを比較することで、オンギン銘文上のすべての抽象的な人物を具体的な歴史上の人物に比定したり、またそれらの系譜上での関係（付表1を参照）を明らかにすることさえできる。

テキスト双方を直接突き合わせることで、漢文史料でのイルテリッシュ・カガンの次弟（補註14）である咄悉鬲（Дусипо=Дуси-бег）とオンギン銘文のエレトミッシュ・ヤブグとは同一人物であることが確証される。イルテリッシュの治世（682-691年）に、彼は「ヤブグ」の称号を得て、より権威のある東（テリスの）翼の突厥軍の司令官に任命された。クリャシュトルヌイ（С. Г. Кляшторный）はチョイレネン銘文やオンギン碑文に言及された「オグズの7人のベグの」反乱の一つがイルテリッシュ・カガンの治世初期（687年以前）に起こったこと、そして「彼の次弟」がその反乱鎮圧に際して指導的な役割を演じたことを明らかにした【文献

『両唐書』 [ビチューリン訳による]	各種のルーン文字 テキスト	オンギン銘文 [クローソン訳による]
イルテリッシュ・カガンの治世 682年以後		
<p>[(骨咄禄) 自立爲可汗]。以弟默啜爲殺, 咄悉匐爲葉護 (『旧唐書』卷215・突厥伝上)。カガンは「自分の弟の中から、默啜に殺(シャド)の官位を、咄悉匐には葉護(ヤブグ)の官位を授けた」(срп. 266)。 “ヤブグ”であったのは咄悉匐である。</p>	<p>「我が父、カガンは... 部民の上にテリスとタルドゥシュを置き、そこでヤブグとシャドを任じた」(キョル・テギン碑文東面13-14)</p> <p>“ヤブグ”となった人名は挙げられていない。</p>	<p>「我／アルブ・エレトミッシュは／... エレトミッシュ・ヤブグの息子」(第4行目)</p> <p>“ヤブグ”であったのはエレトミッシュである。</p>
カプガン・カガンの治世 691年以後		
<p>[(聖歴) 二年] 默啜立弟咄悉匐爲左廂察, 骨咄禄子默矩爲右廂察 (『旧唐書』卷194・突厥伝上)。カガンは「年上の咄悉匐を／東面のシャドに／骨咄禄の子の默矩を／西面のシャドに／置いた」(срп. 270)。 ヤブグであった咄悉匐は東面(テリスの) シャドとなった。</p>	<p>／默棘連の言葉／ 「我は14歳の時に／タルドシュの部民の上に／シャドとなった」(ビルゲ・カガン碑文東面15行目) 咄悉匐については言及されていない。</p>	<p>「オグズのベグの間では7人の男が我々に敵対した。我が父は... 続いて、彼の主君のそばに出た... 敵は打ち破られた、カガンは／彼にシャドの称号を与えた」(第5-6行目) 「我が父であるシャドは...」(第8行目) エレトミッシュ・ヤブグは東翼のシャドとなった。</p>
ビルゲ・カガンの治世 716年から719年まで		
<p>シャドとヤブグについては言及はない。</p>	<p>「我が弟キョル・テギンと、2人のシャドと共に、我は獲得した...」(キョル・テギン碑文東面27行目) シャドの名前はない。しかし彼らの一人は、キュリ・チョルで、彼はタルドゥシュの西面シャドであり、もう一人はエレトミッシュで東面のシャドであった。</p>	<p>「／汝らは、我が父であるエレトミッシュ・ヤブグは／ “... 我が強大なる／勇敢なるカガンから／ヒツジ年の7月に離れて行った、去った”、つまり死んだ」(第12行目)。</p>

表1：漢文史料及びルーン文字銘文テキストでの内容比較

24, p. 99]。ただし、たぶん、この反乱を撲滅したあとに、咄悉匐はエレトミッシュ・ヤブグの名前を得たのであろう。

イルテリッシュの死後、この時からカプガン・カガン（691-716年）として知られる彼の弟の黙啜が即位した。オンギン碑文で咄悉匐、即ちエレトミッシュに応じて、違った官称号である「ヤブグ」と「シャド」が同時に記されている理由は次のように説明できる。つまりカプガンは、イルテリッシュが咄悉匐に授けた「ヤブグ」の官称号を奪った、そして当面のトクズ・オグズの反乱を鎮圧したあと、「東面のシャド」に任命した（第5－8行目）。突厥は建国以来、鉄勒の軍事力によって「北方を支配した」のであるが、その鉄勒グループの部族連合の一つが突厥の支配に対して長期にわたる一連の反乱を起こしたことがチョイレンとオンギンの両銘文に反映している【文献25, стр. 301】。咄悉匐ことエレトミッシュの兄にあたる2人の可汗が内部の混乱の最も危険な震源地の処理を彼に任せることで、彼に信頼を寄せたことは、この人物が司令官として非凡な才能を持っていたことを物語っている。

咄悉匐ことエレトミッシュがカガン氏族に属することについての補足的な情報を考古学的資料は与えている。まず第一に、彼は支配氏族である阿史那の一員であるというだけで、石碑の礎石として亀の形をした聖性をもつ資格を無条件でもっていた。第二に、オンギン石碑の上部には竜は表現されていない、というのも咄悉匐ことエレトミッシュはカガンではなかったからである（補註15）。第三に、その広い面では第1－8行の上にはビルゲ・カガンやキョル・テギンの各石碑での雄山羊と同一の、左向きになった雄山羊の形をしたタムガが刻まれているが、そこには2つの補足的なおたま記号が付されている。クローソンはホショー・ツアイダム石碑とオンギン石碑でのタムガは似てはいるが、同一のものではない。このことからオンギン銘文に言及された人物はキョル・テギンと同一の氏族の成員ではあったが、直接的にはその家族出身ではないという推測が当然、生まれてくる【文献21, p. 177】。オンギン石碑の上部のタムガ（図4, 2）、これは咄悉匐ことエレトミッシュの家族の紋章である。

オンギン銘文（クローソンによる読み）から見れば、エレトミッシュ・ヤブグには何人かの息子がいたが（第4行目と第11行目）、名前と称号が挙げられているのは2人だけで、長男がイシュバラ・タムガン・チョル・ヤブグで、次男はビルゲ・イシュバラ・タムガン・タルカンの称号を持っていたアルプ・エレトミッシュである。同時に「イシュバラ」で、かつ「ヤブグ」でもあったタムガン・チョルの名前は、翻訳でなされた間違いを正して、第4行目での「弟」を「従弟」に置き換えた場合においてのみ、歴史文献中での著名な歴史上の人物と同一視することができる。このような置き換えは、ルーン文字テキストでの“ini”の語が近親者の中でのより若い世代の成員（弟、甥、孫、また従兄弟の中で年齢的に年若い者）を意味するということから十分に許容できることである（補註16）。この場合、実際に咄悉匐ことエレトミッシュの長男というのはアルプ・エレトミッシュであったことになり、彼は記念石碑に、単に父の事績のみならず、自らに関する事も短く挿入する当然の権利をもっていた

のである（第9－第12行目）。

小さい方の石碑頭部と失われたバルバル石上に表現されている同じ形のタムガ（cf. 図4, 3と図2, 6）は、咄悉訶ことエレクトミッシュの息子達の一人のタムガである。これらのタムガと大石碑のタムガとの共通した類似点はそれらの持ち主が近親関係にあることを確証するものであるが、1本の鉤型マーク（クローソンによれば、「逆ステッキ」）が小石碑とバルバル石には欠けていることは、その持ち主が父の家族からは分かれていたことを示している。これに該当する者としては、オンギン銘文の第11行目で言及された自らの子供達の言及から判断すると、咄悉訶ことエレクトミッシュの長男、即ちビルゲ・イシュバラ・タムガン・タルカンであるアルプ・エレクトミッシュであった。

彼の従兄弟であるイシュバラ・タムガン・タルカン・ Chol・ヤブグに関しては、彼はイルテリッシュ・カガンの次男で、ビルゲやキョル・テギンとも実の兄弟であり、漢文史料ではクトルグ・ヤブグ（「骨咄祿葉護」）として知られる【文献25, crp. 277-278】^{（補註17）}。「ヤブグ」の官称号をクトルグは兄であるビルゲ・カガンから得た。そしておそらくは彼が軍隊のテリス翼を統括するにあたっては、自らの老齢な叔父で、ずっと「シャド」の官称号を保ち続けた咄悉訶ことエレクトミッシュを、第二線に退かせたのであろう^{（補註18）}。ビルゲ・カガン石碑やキョル・テギン石碑に表現されたのと同じタムガをもつ石人7（図2, 5）が、咄悉訶ことエレクトミッシュか、クトルグ・ヤブグ自身か、もしくは彼の有力な兄弟のうちの誰かの追悼遺跡に建てられていたと推定することはできよう。

文献史料は咄悉訶ことエレクトミッシュの晩年については何も語らないが、特にオルホン銘文のひとつには、彼が716年のビルゲ・カガンの即位式に出席して、高官に就いていた人物リストの中で言及されているかもしれない。当箇所は次のような順序で配されている；「後方に（西方に）タルドシュ・ベグ達とキュリ・Cholを先頭に、それに続いてシャダプト・ベグ達；前方に（東方に）テリス・ベグ達とアパ・タルカン...（クトルグ・ヤブグ？）先頭に、それに続いてシャダプト・ベグ達；（右手に、南方に）...（？）... タムガン・タルカンとトニユクク・ボイラ・バガ・タルカンを先頭に、それに続いてブユルク・（ベグ達）..；（左手に、北方に）... “内部の” ブユルク達、キョル・イルキンを先頭に、それに続いてブユルク達」（ビルゲ・カガン碑文、南面第13と第14行目）。上に見るように、銘文には「タムガン・タルカン」の称号の直前には、それを帯びていた人物名がなくなっている。その該当者が、官称号や彼に相応しい官位を失いつつも、死ぬまで「印璽官のタルカン」という尊敬すべき称号を保持していた咄悉訶ことエレクトミッシュであったことは十分に考えられる。

その際に「タムガン・タルカン」は、イルテリッシュやカプガンの顧問であり軍事司令官であったトニユククと一緒に置かれているばかりでなく、トニユククの前に置かれているという状況は次のように説明できよう。トニユククはカプガン・カガンの死の直後、ビルゲ・

カガンやキョル・テギンから失脚させられた^{（補註19）}。彼はただ、「彼の娘の婆匁（婆匁）が黙棘連の妻であった」、一方「部民は彼を尊敬し、畏怖していた」といった理由から、カプガンの後継者や側近者と一緒には処刑されなかった。トニユクは国家の最重要事項からは遠ざけられ、「自分の一族のもとへ追放された」【文献25, стр. 273】^{（補註20）}。しかしこの場合、銘文の引用した箇所によれば、彼はなお「ブユルク達・ベグ達の長」（筆者は「ボイラ・バガ・タルカン」の称号のことをいっているであろう—訳者註）という十分な高位を保持していた。ひょっとしたら、ビルゲ・カガンは、失脚はしているが、経験豊富な政治家のトニユクに対して、その分派行動を防ぐ目的をもって、慎重に自分の叔父の咄悉匁＝エレトミッシュを付けたという可能性も否定できないであろう。

「ヒツジ年」の7月に咄悉匁ことエレトミッシュは「強大な（勇敢なカガン）から別れた…そして去った」、即ち亡くなり、彼の長男であるアルプ・エレトミッシュは「彼の埋葬儀式を挙げて、墓所を造営した」（第12行目）、これがオンギンの追悼遺跡群にあたる。これを建造しつつ、アルプ・エレトミッシュは、咄悉匁ことエレトミッシュの敵を象徴化したバルバル列石の先頭に【文献26, стр. 252-255】、自らのタムガと自らの事績を刻んだ石、即ち「イシュバラ・タルカンのバルバル」を個人的な贈り物として立て置いた^{（補註21）}。これは719－720年に起こった。

オンギン石碑には補足の銘文があるが、クローソンの論文ではそれは完全には翻訳されていない。クローソンは、研究に際して自身が利用したラドロフの拓本から判断して、この「7行からなる横書き銘文は主碑文上の4行の上に刻まれたというよりは、引っかいて書かれている」【文献21, p. 177】ことと、拓本（оттиск）の質について、正しく翻訳するためには十分に満足すべき出来ではないとだけ述べて、続いて、補足銘文の最初の2行のみを翻訳するにとどまっている【文献21, pp. 189-190】。しかしマローフの翻訳によれば、そこではさらに、極めて重要な日付、即ち「タツ年」が言及されている。しかしそれを、クローソンが主碑文の第12行目で訂正したようには、「ヒツジ年」に訂正されていないことからすれば、マローフのこの翻訳には疑問の余地がないものとみなすことができる。

テキストは伝えている：「我が父に、石の銘文を、（私は）記念碑を（彼の）ために作った。我がカガン、我が親愛なる父、賢明な我が父よ！タツ年に、賢明な名声ある男、高貴なハンである我が父は、死んだ」【文献22, p. 11】。この引用句には、ひどく破損した銘文を解説する際に、その意味が根本的な異なった読みを引き起こすような単語が含まれている。つまり「我がカガン、我が親愛なる父」という語と「高貴なハンである我が父」がそれである。それらが、彼のもつ称号、即ちビルゲ・イシュバラ・タムガン・タルカンという称号からみても、古代テュルクの部族連合を構成していた部族のうちの1つの支配者（イシュバラ＝ハン）であったアルプ・エレトミッシュに向けられていることはまず間違いない。

アルプ・エレトミッシュは「タツ年」（728年）に死んだ、そして追悼儀式が早くも彼の息子達の誰かによって挙行された。家族のオンギン記念遺跡の東部に、彼はアルプ・エレトミッ

シュのタムガを持ち、彼が支配氏族に属することを象徴化した亀の荒っぽい彫刻表現がなされた板石状礎石を伴う小石碑を立てた（補註22）。そして祖父の立石の側面に刻まれた父の銘文の上方に、この悲しい結末になって碑文を完成させるかのように、銘文7行を「引っかいて書いた」。

結論として、オンギン遺跡に関する資料についての複合的な文化研究によって、内陸アジアにおける一連の類似した古代テュルクの記念建造物の中で、これが占める歴史的位置を明らかにすることができる。かつてそれぞれが孤立して研究されてきた文献史料と考古学資料のばらばらな情報を分析及び総合することによってのみ、今後、古代テュルクの歴史と文化の多様な現象の解明に着手することができよう。オンギンの記念遺跡はそれ自身の中にもなお少なからざる謎を秘めており、完全な考古学調査を必要とする。

引用文献番号

- 1) Кляшторный, С. Г., Современные проблемы исследования памятников древнетюркской письменности. In: *Проблемы Современной Тюркологии*, Алма-Ата, 1980, стр. 318-324.
- 2) Кляшторный, С. Г. Древнетюркская цивилизация: Диахронические связи и синхронические аспекты. *Советская Тюркология*, 1987. No. 3, стр. 58-62
- 3) Ядринцев, Н. М. Отчет и дневник о путешествии по Орхону и в Южный Хангай в 1891г.. In: *Сборник трудов Орхонской Экспедиции V*, 1901, Санкт-Петербург, стр. 1-54.
- 4) Radloff, W., *Атлас древностей Монголии*. Санкт-Петербург. 1892, вып. 1, Табл. 14,2-4; 26.
- 5) Клеменц, Д. А., *Краткий отчет о путешествии по Монголии за 1894г., Изв. Импер. Академии наук*, 3-3, Санкт-Петербург, 1895.
- 6) Radloff W. *Die alttürkischen der Mongolei*. Sankt-Peterburg, 1895.
- 7) Radloff, W., *Атлас древностей Монголии*. Санкт-Петербург. 1893, вып. 2, Табл. 83,5.
- 8) Pälsi, S. *Mongolian matkalta*. Otava; Helsinki., 1911.
- 9) Idem. *Valkoiset arot: Muistoja Mongolian matkalta*. Otava; Helsinki, 1949.
- 10) Ramstedt, G. I., *Seven journeys eastward 1898-1912*. Bloomington, 1978.
- 11) Halén (ed.) *Memoria Saecularis Sakari Pälsi. Aufzeichnungen von einer Forschungsreise nach der Nördlichen Mongolei im Jahre 1909 nebst Bibliographien*. Helsinki. 1982.
(この場を借りて、本著作を知ることができたことに対して、V. V. ヴォルコフ（Волков）には衷心から感謝の意を表したい。）
- 12) Tryjarski, E. & P. Aalto. Two Old Turkic Monuments of Mongolia. *Mémoires de la Société Finno-Ougrienne* 150, Helsinki, 1973, pp. 413-420, -3 pls.
- 13) Tryjarski E. On the archaeological traces of Old Turkic relics in Mongolia. *East and West*. N. S. 21-1/2, Roma, 1971., pp. 121-135, +many pls.
- 14) Idem. The Present State of Preservation of Old Turkic Relics in Mongolia and the Need for their Conservation. *Ural-altaische Jahrbücher* 38,1966, pp. 158-173, +many pls.
- 15) Козлов, П. К. *Путешествие в Монголию: 1923-1926 гг.* Москва. 1949.
- 16) Tryjarski, E. Zur neueren Geschichte des Ongin-Denkmal. In: *Sprache, Geschichte und Kultur der Altäischen Völker. (Schriften zur Geschichte und Kultur des Alten Orients 5)*, Berlin, 1974, s. 629-630,

+1 pl.

- 17) Войтов, В. Е. & Д. Баяр. Новые археологические открытия в Хангае. *Информ. Бюлл. Междунар. Ассоц. по Изучению Культур Центральной Азии* 16, Москва, 1989, стр. 59-67.
- 18) Kotwicz, W. & A. Samoïlovitch, Le monument turc d'Ikhe-khuchotu en Mongolie Centrale. *Rocznik Orientalistyczny* 4, Warszawa, 1928, pp. 60-107.
- 19) Козлов, П. К., *Три года по Монголии и мертвый город Хара-Хото*. Москва-Ленинград, 1927.
- 20) Он же. Русский путешественник в Центральной Азии. *Избр. Тр. : к 100-летию со дня рождения (1863-1963)*, Москва, 1963.
- 21) Clauson, G. The Ongin inscription. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. 1957-3/4, London, pp. 175-192.
- 22) Малов, С. Е. *Памятники древнетюркской письменности Монголии и Киргизии*. Москва-Ленинград, 1959.
- 23) Гумилев, Л. Н. *Древние Тюрки*. Москва, 1967.
- 24) Кляшторный, С. Г., Древнетюркская надпись на каменном изваянии из Чойрэна. *Страны и народы Востока* 22, Москва, 1980, стр. 249-258.
- 25) Бичурин, Н. Я., *Собрание сведений о народах, обитавших в Средней Азии в древние времена*, Москва, 1950, Том. 1, ч. 1
- 26) Кляшторный, С. Г. Храм, изваяние и стела в древнетюркских текстах. (К интерпретации Ихе-Хан ын-норской надписи). *Тюркологический Сборник 1974*, Москва, 1978, стр. 238-255.

訳者(大澤)による補註

- 1) 原文では300km とあるが誤植であろう。
- 2) 訳者を含む日本・モンゴル遺跡合同調査隊は1996年8月21日に現地の本遺跡を調査した際、本バルバル石が遺跡のマウンド東方に続くバルバル列石の第11番目に位置する事を確認した。なおバルシが撮影した写真で確認される左向きの雄ヤギ形タムガとその右に配された逆「し」の字形タムガは現在でもはっきりと確認できるが、ルーン文字銘文部は既にはぎ取られてしまっていた。なおトリヤルスキとアールトは文献12の p. 417 でこの銘文を「ウイグルの碑文」と呼ぶが、「古代テュルク(突厥)の碑文」と訂正すべきである。
- 3) ヴォイトフはラムステッドやバルシの記載に依拠して、遺跡のマウンド東方に伸びる先頭のバルバルに銘文と2つのタムガが刻まれていると考えているが、これは先の註2で述べた如く、誤解である。
- 4) 我々が1996年8月21日で現地調査を行ったときにもこの石は発見されなかった。訳者は既に別稿(『オンギ碑文』『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』1993,中央ユーラシア学研究会,大阪大学文学部, p. 130-c.)で、オンギン遺跡のマウンド内部にもバルバル石が存在することを指摘した。恐らく、このタムガをもつ人間らしき形状をした石柱もバルバルであった可能性は高い。
- 5) 碑頭は現地遺跡にあり、我々の調査隊は1996年8月20日に測定及び拓本を採択した。また小断片はアルバイヘル市郷土博物館に所蔵されているが、我々はその寸法や切断部を測定し、拓本を採択した(1996年8月21日)。そして『アトラス』のオンギン碑文のヤドリントツェフ拓本と照合した結果、小断片の上部は碑頭の下端に接続することが明らかになった。
- 6) 補註5で触れた1996年の現地調査の際、小断片はもとの碑文の頭部の広い方の面(大澤によれば東面)の第5～8行目の碑文冒頭部に相当することが判明した。従って、ヴォイトフの推測は正しくない。
- 7) 訳者は本中断片に残されたルーン文字の拓本とアトラスの拓本とを比較検討した結果、本碑文は紛れもなく、もとの碑文の東面の6～8行目に相当すると断言できる。それ故、ヴォイトフの何か別の遺跡に属するとの見解には従えない。
- 8) ヴォイトフは先の中断片も本大断片も側面はもとのままで、叩き割られていないとの見解にあるが、我々の調査では側面もまた何か鋸のような鋭利な刃物で切断された形跡が確認された。そして何よりも我々の採択した本断片の拓本上の文字をアトラスの拓本と比較対照した結果、大断片は東面1～4行と北面4行の一部の文字が刻まれていたことが判明した。それ故、我々はトリヤルスキの見

解が正鵠を得たものと見なすべきである。

- 9) ブグト碑文については1997年8月27日にツェツェルレクのアルハンガイ県博物館で、拓本を採択した。ソグド語学者の吉田豊（神戸市外国語大学教授）の解読成果によれば、本碑文の主人公の一人と見なし得るカガン名については、かつてリフシツが判読したタスパルなる読みは誤りで、タトバルに訂正すべきことが明らかとなった。なおこの碑文の内容については、吉田豊・森安孝夫「ブグト碑文」『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』1993、中央ユーラシア学研究会、大阪大学文学部、pp. 122-125を参照のこと。
- 10) 現地の遺跡に残されていた碑文碑頭断片の左向きの雄ヤギ形タムガの腹部には垂直に亀裂が入っていることが判明した。これはかつてラドロフがヤドリツェフ拓本からこの垂直線をも雄ヤギ形タムガの一要素と見なしたものであり、これまでこの見解が踏襲されてきた。ヴォイトフもこの見解に基づき、現地の碑頭にはアトラスの復元図にある垂直線が確認されないとの理由から、これは別の碑文、即ち彼のいう小石碑と見なす根拠としている。しかしこのような見解はもはや受け入れがたく、オンギン遺跡には建造当初より、石碑はたった一つであったと見なすべきである。次の補註11も参照のこと。
- 11) 現地碑頭部の上部は半円形に加工され、その内側には左右対称に配された簡略な文様が確かめられた。訳者は、東突厥の復興の功労者であった大宰相のトニユククやビルゲ・カガンの側近であった高官キュリ・チョルを記念する石碑の頭部には全く半円形の加工などは施されず、角状のままであることを考えると、本碑頭に上のような装飾文様がなされていることは注目し値すると思われる。訳者としてはこの碑頭の文様は雄ヤギ形タムガの左に刻まれた逆「し」の字形タムガと同じく、本遺跡の被記念者（被葬者）がイルテリッシュ・カガンとは別の阿史那氏出身であることを間接的に伝えるべく工人のとった表現であると考え。その意味で、本文様が龍の簡略表現である可能性は高いといえよう。またこの簡略表現は、本石碑の基台である亀趺の稚拙な亀の像とタイアップするものと言える。
- 12) この読みはクローソン及びテキンの読みであり、人名とみている。これとは別に小野川秀美や沢田勲氏は *il itmiš* と転写して、「国作りたる」と形容語として解している。尚、クローソンらのいうアルプ・エルトミッシュの Alp の語については、訳者らが将来した本碑文の拓本部からは確認できず、訳者としては従いがたい。当該箇所を読みに関する検討についてはさし当たり、沢田勲「オンギン碑文東面第四行の解釈について」、(護雅夫編)『内陸アジア・西アジアの社会と文化』東京、山川出版社、1983、p. 85-90を参照のこと。
- 13) ヴォイトフは1902年のラムシュテットやパルシが本遺跡を訪れた際に、遺跡中央部の穴には亀の表現がなされた台が、頭を西に向けていたとの記載から、本碑文の広い方の面を西面に、狭い方の面を南面にしていたと考えたのであろう。しかし本遺跡を1891年に最初に発見したヤドリツェフは本石碑が南を向いて立てられていたことを記している。そうであれば、発見当初の石碑は南を向いていたことからすれば、亀の頭は南向きであったことになる。つまり亀の向きは1891年から1902年の間に何者かの手で動かされたことは明らかで、それ故、ヴォイトフの考えには同調しがたい。訳者としては亀の向きは、当時の古代テュルク人は東方を前方とする方位観からみて、亀は頭を東に向けていたと考え、建造当初の本碑文は広い方の面は東方に、狭い方の面は北方に向けていたと考えている。
- 14) 『旧唐書』巻194 突厥上の記載では、「默啜者、骨咄祿之弟也。骨咄祿死時、其子尚幼、默啜遂篡其位、自立爲可汗。」とあり、第二代の默啜（碑文ではカプガン・カガン）は東突厥第二可汗国の初代、骨咄祿（碑文ではイルテリッシュ・カガン）の弟で、骨咄祿の死亡時には兄の息子が幼少故、代わって可汗に即位したことが記されている。また同書には「(萬歲通天) 二 (699) 年、默啜立其弟咄悉匐爲左廂察、骨咄祿子默矩爲右廂察、各主兵馬二萬餘人。」と、咄悉匐は默啜の弟で、默啜政權では骨咄祿の子の默矩が右翼の右廂察 (*tarduš šad*) に就くのと同時に、その左翼たる左廂察 (*tölis šad*) に就任したことが知られる。それ故、ヴォイトフが咄悉匐を骨咄祿の次弟と記するのは誤りである。
- 15) 本補註11でも記した如く、本石碑の碑頭には龍の簡略表現である可能性をもつ模様が刻まれている

ので、訳者はヴォイトフの見解には尚、検討を要すると考える。

- 16) Clauson, G., *An Etimological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*, Oxford, 1972, p. 170 や, Наследия, В. М. (ед.), *Древнетюркский Словарь*, Ленинград, стр. 210-211などの古代トルコ語辞典でも, "ini" には「弟」の意味しかなく、ヴォイトフのいうようにルーン文字碑文の中で, "ini" の語が「甥、孫、また従兄弟の中で年齢的に年若い者」を意味する事例を見いだすことはできない。またこのことは近年、古代テュルクの親族名称を検討した Baştug, Ş., *Kök Türk Kinship Terminology: an Omaha Model*, *Central Asiatic Journal*, 37-1/2, p. 6. の親族体系図でも ini はただ弟を意味する位置にあることから証される。
- 17) ヴォイトフのいう「骨咄祿葉護」なる人物は『新唐書』巻215 突厥下にみられ、ビルゲ・カガンの死後、後を嗣いだ息子の伊然可汗、その死後はその弟の登利可汗の時代に東西の兵馬を握る左右の殺 (sad) に任じられた彼の従父 (父の兄弟) の一人として記載がある。その意味では骨咄祿葉護がビルゲ・カガンの兄弟であった可能性は高い。しかしビルゲ・カガンの死後まで、咄悉訶が生きながらえたという文献の記載はなく、ましてや骨咄祿葉護と同一人物であったとする見解には従えない。
- 18) 沢田勲氏の研究によれば、碑文上のイル・イトミッシュ (またはイルテミッシュ・ヤブグ) は漢文史料で咄悉訶に比定され、彼は默啜の死 (716 年) 後、キョル・テギンにより起こされたクーデタによって殺害された可能性が高いといえる (沢田勲「オングン碑文に関する一考察」『東洋史研究』41-4, pp. 65-69)。それ故、本箇所でのヴォイトフの推測には従いにくい。
- 19) これは漢文史料との記載とは全く逆で、むしろトニクク (阿史徳元珍; 噶咎欲) は默啜政権の晩年には政権から疎外されつつあった。默啜の死後、ビレゲ・カガン、キョル・テギン兄弟による肅正の中で、彼は自分の娘がビルゲ・カガンの妻で、かつ彼ら兄弟の父と共に国を復興させた実績を背景に、生きながらえ、再びビルゲ・カガン政権の重鎮として復帰したのである。それ故、ヴォイトフの見解には従いがたい。
- 20) このヴォイトフの記載についても先の補註19と同じく、従いがたい。
- 21) これまた従いがたい。問題のバルバル石の位置については補註2を参照。
- 22) これも従いがたい。石碑としてはたった一つでしかなかったとすべきである。これについては上述の補註10を参照。

[後記]

上に訳出した論文の原題はВ. Е. Войтов, Онгиский Памятник. Проблемы Культуробедческой Интерпретации. *Советская Тюркология*, 1989, No. 3, стр. 34—50. である。著者ヴォイトフは訳者が聞知した所ではモスクワの国立東洋諸民族美術館 (Государственный музей искусства народов Востока) の研究員であり、ユーラシア草原の中世初期の遊牧民に関する考古学を専門分野とする中堅のロシア人考古学者である。特に彼はモンゴルの民主化以前に行われた蒙ソ合同遺蹟調査団考古碑銘班のメンバーとして遺蹟調査に従事してきた。その中でも1980年代以降には、モンゴル人研究者と共同で精力的に現地調査を行い、古代テュルク及びモンゴル帝国時代に関わる遺蹟や都市城址の調査と研究成果を精力的に発表してきている。古代テュルク関係でいえば、これまでの調査成果を総括した最新作としては、例えば *Древнетюркский пантеон и модель мироздания в кыльтово-поминальных памятниках Монголии VI—VIII*, 1996, Москва. を挙げることができる。彼の研究の特徴は遺蹟・遺物の規模や構造の性格には遺蹟の被葬者の身分や地位が反映されているとの観点から、かつてウラジミルツォフが提唱した王侯の諸遺蹟を、現地における綿密な考古学的調査結果を踏まえて、各グループに分類した上で、ラドロフの『アトラス』所収の拓本に依拠する文献学者の読みと解釈と照合しつつ、被葬者像や遺蹟の建造背景を歴史文化的に明らかにして行くという総合的な実証的方法が採られている点にある。

本論文でも、上記の視点からまず遺蹟と遺物の調査結果に基づき、先行調査との比較と相違点が明らかにされ、その後で従来の碑文テキストの内容との照合が検討されている。なお既に補註で訳者が示したように、碑文テキストや漢文史料などの文献資料の記載に基づいたものとして彼が述べる記載には、若干の誤解や今日では訂正すべき箇所、さらにはなお異論のある箇所も少なくないが、これは彼が考古

学の専門家で、古代テュルク文献学者ではないこと、かつ漢文文献の利用の際には、ビチューリンの翻訳を用いざるを得なかったという事情からすれば、やむを得ぬものであろう。むしろ訳者としては、本論文の価値は、本遺跡と遺物の調査研究史を辿りつつ、計測値や現存状況を記した前半部分にあると考える。何となれば、本遺跡に関する現況に関しては1962年のトリヤルスキ隊の調査以降、その全容がほとんど不明であったのが、本報告を通じて遺跡状況が具体的に報告されているからである。既に発表されて以来10年を経過しているとはいえ、そこで示された遺跡や遺物に関する測定値や図版の多くは今なお、価値を失っていない。その意味で、本論文は本遺跡と碑文を今後、研究する上で重要な視点と細部の遺跡データを提供してくれているという意味で、一読の価値はあると考え、訳出した次第である。

訳者は本論文を既に1996年での日本・モンゴル共同の遺跡調査を終えた後に訳出しておいた。なおその際には同じく共同調査隊のメンバーである創価大学の林俊雄教授から考古学上の用語や表現について、チェック及びアドバイスをさせていただいた。ここに記して感謝したい。なお申すまでもなく、本翻訳上の全責任はすべて訳者にあることを改めて記して、後記とさせていただきます。また訳者には本遺跡・碑文については現地調査に基づき、本ヴォイトフ論文での遺跡調査結果を検証した別稿（「古代テュルクのオング遺蹟・碑文をめぐる諸問題－モンゴル国内での現地調査を通してみた－」『中東イスラム文化の諸相と言語研究』大阪外国語大学、1999、pp. 275-298）がある。併せて参照いただければ幸いである。

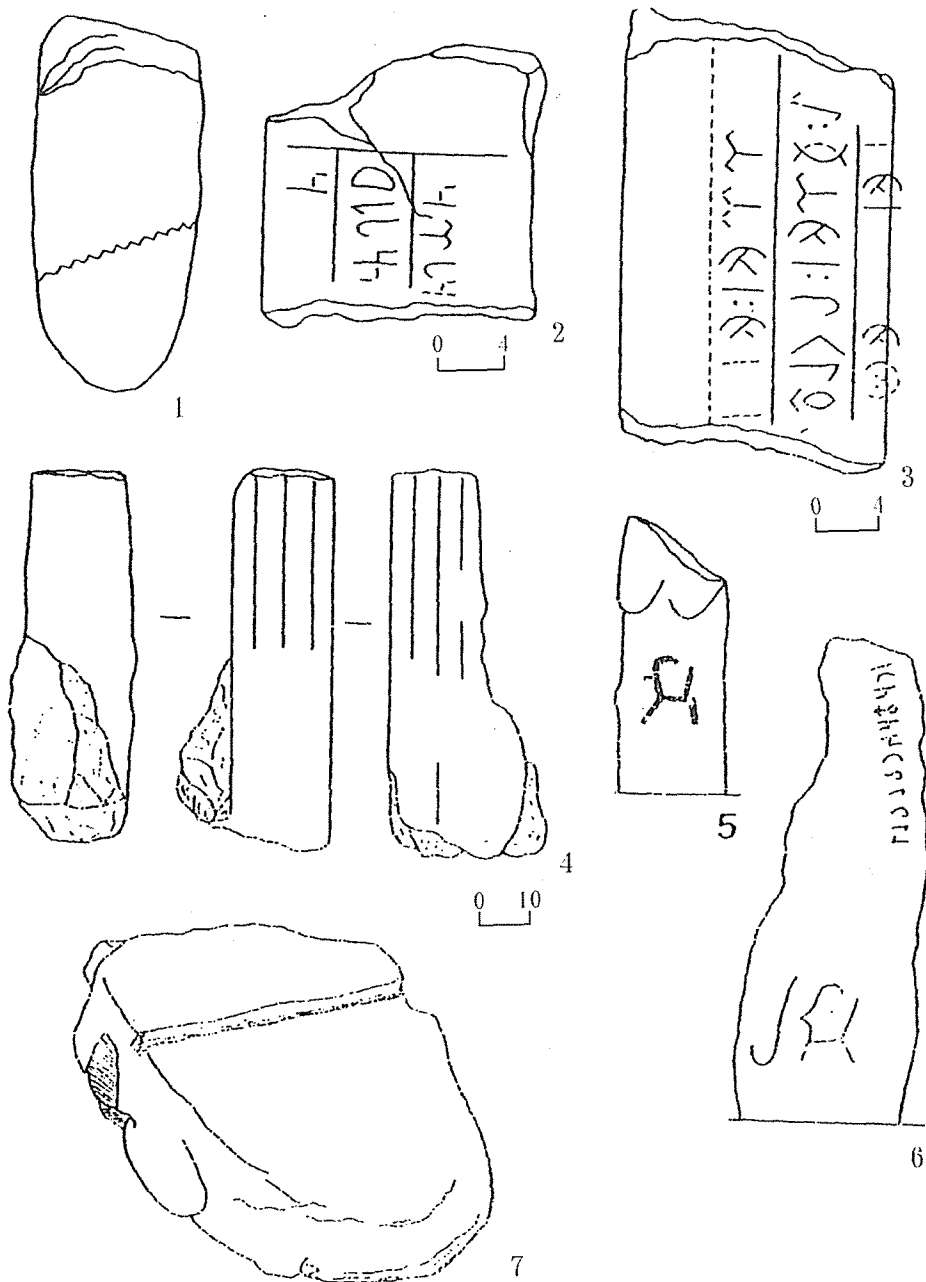


図2. 石碑, バルバル石, 亀趺:

1 - 小オンギン石碑の基部 (E. トリヤルスキによる); 2 - 4 - アルバイヘル市郷土博物館所蔵の小断片, 中断片, 大断片; 5 - オンギン遺跡の石人 No. 7 (V. V. ラドロフによる); 6 - オンギン遺跡のバルバル (S. パルシによる); 7 - オンギン遺跡の大きい亀趺 (E. トリヤルスキによる)

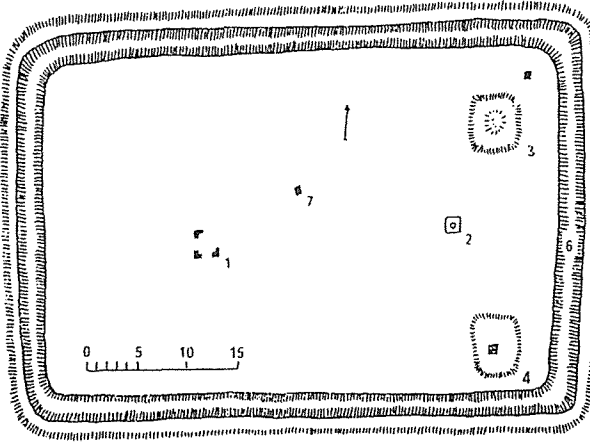


図1. オンギン遺跡の平面図
(S. パルシによる)

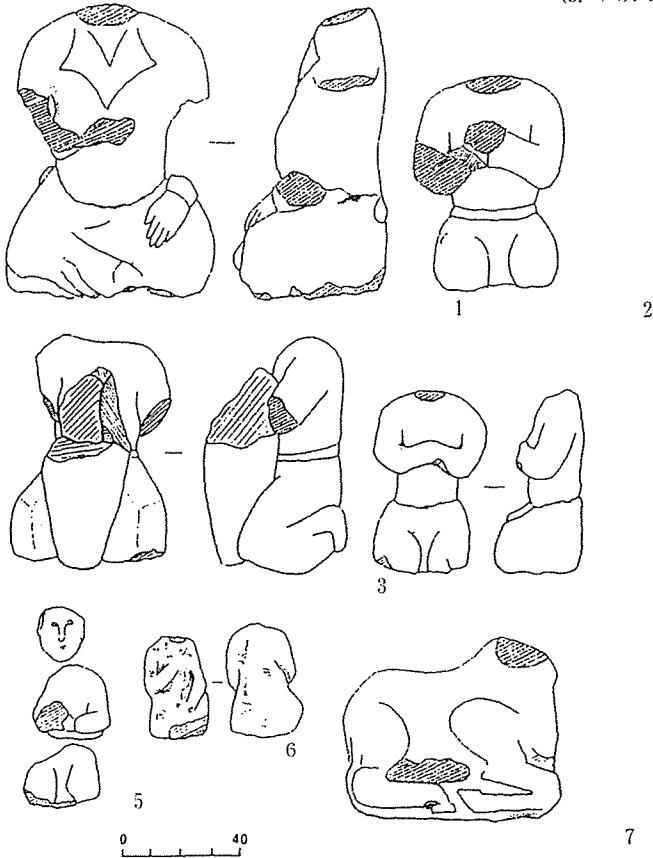


図3. オンギン遺跡の石像：

1－石人1；2－石人3；3－石人2；4－石人4；5－石人5；6－石人6（S. パルシによる）；7－石羊像

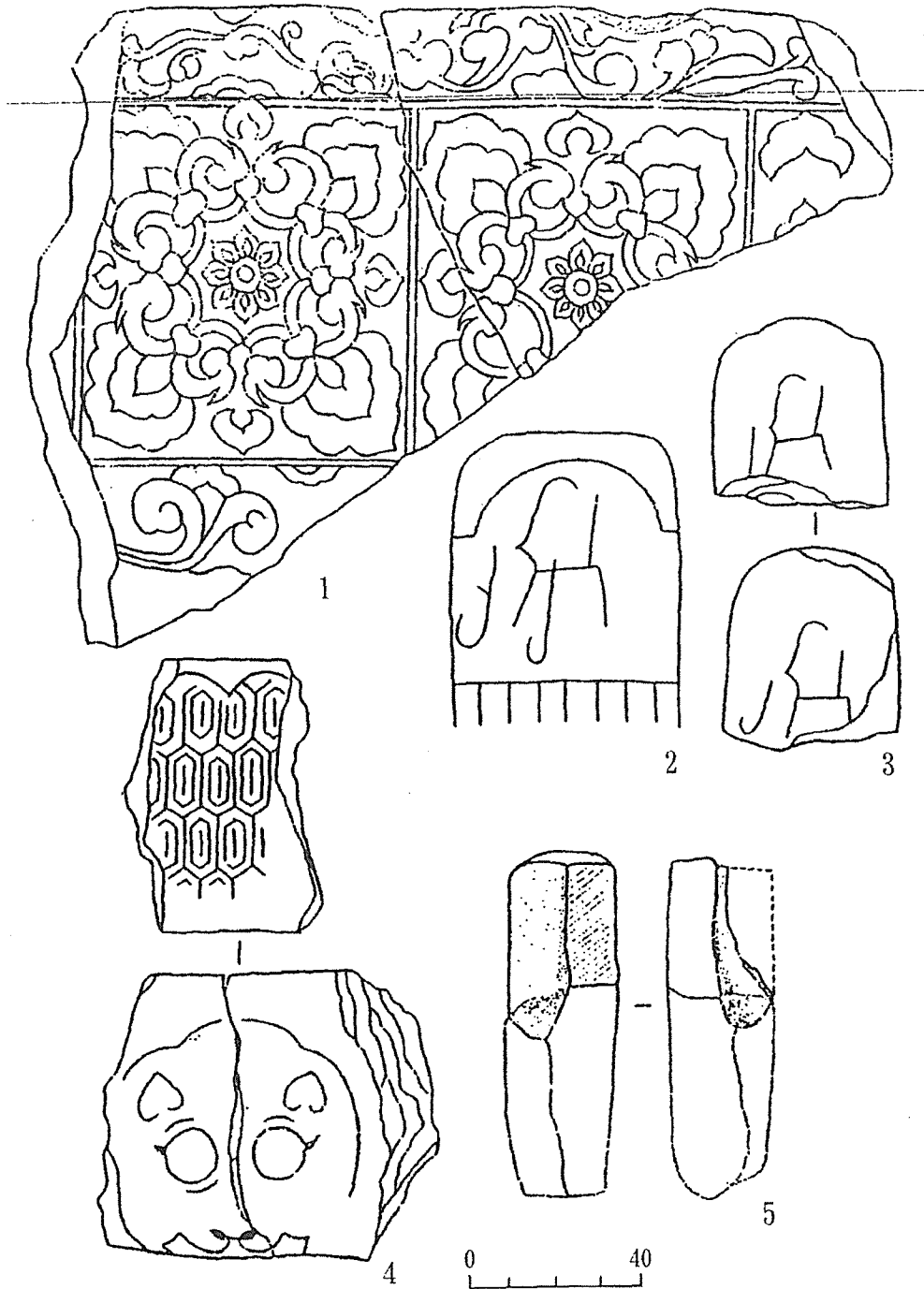


図4. オンギン遺跡の諸遺物：

1－追悼儀式用石棺の板石断片；2－大石碑の碑頭 (S. E. マローフによる)；3－小石碑の碑頭；4－小石碑の板状基台の断片；5－追悼儀式用石棺の隅石 (1999.5.10 受理)